

日本語の文法・談話と場の理論

大塚正之（早稲田大学）

1. はじめに

日本語の文法・談話については、欧米の言語とは異なる構造が存在すると指摘されている。また、欧米のポライトネスの考え方では、日本の敬語や礼儀のある表現を理解することはできず、これと異なる「わきまえ」という考え方が必要であることが明らかにされてきた。

その背景には、日本の文化の基底にある「場」を重視する考え方があり、その場というものが日本語の文法や談話の構造に大きな影響を与えていると考えられる。場があることにより、状況やコンテキストに依存しなくても、主語を明示しないまま意思疎通に支障がないため、日常的に主語のない談話が交わされる。この場と日本語の文法及び談話との関係性をより具体的、実証的なデータに基づいて解明したい。

2. 場と状況（情況）・コンテキスト

言語処理の計算モデルを創ろうとした場合、必然的に自然言語の持つ文脈依存性に逢着する。一般に自然言語の多義性というのは、文脈依存性の高さを表現していると考えられる。コンテキストは文脈と訳されることが多いが、多義的であり、例えば、聴き手の注意に重点を置く関連性理論(Relevance Theory)では、コンテキストとは、発話を解釈する際、聴き手がアクセスする想定 (assumption) の集合と定義される。対話の認知プロセスにおいては、広義には発話の行われる環境を指すとされ、発話を取り巻く場面および発話の前後を取り巻く他の発話を意味すると言う（ことばの認知科学事典 305 頁）。また、言語の産出と理解に関する意味づけ論は、「意味は主体の状況内で行われる」とし、状況が意味づけされる以前のもの・ことの集合であるのに対し、状況は、今・ここを生きる主体にとっての意味世界であり、ことばは状況内で意味づけられる事態としてその意味を担うと言う（田中・深谷：1998）。場の言語学は、このような状況・コンテキストという概念を更に拡張し、むしろ、その言語の話し手や聞き手を取り巻く環境をひろく「場」として捉えて、この「場」の方から言語を捉えようとする視点を持っている。

また、言語の発達についてみると、言語には生得的な基盤があるとしても、それが具体的にどのように発現するのかは、その個体が生育する環境に深く依存していることは、言語的環境が欠けていれば言語の習得が困難となり、どのような言語を習得するのかは、その個体が生育する言語環境に依存することからも明らかである。この言語発達を可能とするような環境を広く「場」と考えて、どのような場がどのような言語の発達を可能とし、また促進するのかを考える視点を持つのが場の言語学である。

3 場と日本語の文法

中村雄二郎（『西田幾多郎Ⅱ』：2001）は、時枝誠記の言語過程説における客体的表現（詞）と主体的表現（辞）との結びつきにおける〈場面〉の考え方を西田幾多郎の場所の論理と関係づけて、日本語の統語論には次のような特徴があると指摘している。①日本語では、その全体が幾重にも最後に来る辞（主体的表現）によって包まれるから、主観性を帯びた感情的な文が常態となること、②文は、辞によって語る主体と繋がり、主体のいる場面と繋がり、この場面の拘束が大きいこと、③日本語の文は、辞＋詞という主客の融合を重層的に含んでいるので、体験的なことばを深めるのに都合がよいが、客観的、概念的世界を構築するのには不都合であること、④日本語の文では、詞＋辞の結びつきからなる構造によって、真の主体は、辞の働きとしてだけ見出されるから、文法上での形式的な主語の存在はあまり重要ではないこと（同書 52 頁以下）である。このように日本語は主観性が高いということは、熊倉千之『日本語の深層』（2011）でも指摘されている。

他方、池上嘉彦『「する」と「なる」の言語学』（1981）では、英語と日本語とを比較したとき、いくつかのかなり際立った対立的な特徴を見てとることができるし、次のように指摘されている。すなわち、英語では、基本的な運動の動詞が〈場所の変化〉を指す場合から〈常態の変化〉を表すのによく転用される。他方、日本語では、〈状態の変化〉を表す動詞が〈場所の変化〉を表すのに転用されるとし、その原因を、英語の場合は、個体中心的な捉え方が本来そうでない分野に拡大されており、日本語の場

合は、できごと全体として捉える見方が拡大適用されているとし、これを、**<モノ>**と**<コト>**に対比させる。そこから、**個体＝モノ**が何かをするという視点と**全体＝コト**が何かになるという視点が導かれ、「する」と「なる」の言語学が導かれる。そして、この「なる」は、主体のない世界、無我の世界やウォーフが描くホーピ族の世界へと連なっていく。そこには動詞を場の変化として捉える視点がある。

古来、ヒトは、個人的主体としては自らを意識していなかったのであり、仏教は古くから主体などないと言い続けている。プラトンないしプラトン主義も実在するのはアイデアであり、個物的実体ではないと主張し続けている。近代的な自我が意識され始めたのは、遡っても12、3世紀であり、はっきりとした近代的自我が誕生したのは、更に後のことであり、それまでは主体が何かをするというよりも、何かが起きるというのが動詞の本来の作用であったと考えられる。場の中での動きを表現するのが動詞であり、動かない何かを表現するのが名詞であり、それは場を規定する2つのモメントであったと考えられる。そこは、誰かが何かをするというよりも、その場において何かが動くという世界である。そのため、文字を持たない民族を始め、古代の民族は、場の中で、常に変化する世界を観ていたのであり、この全体の動く状態が日本語の「コト」であり、このできごとの中で、動かない対象を「モノ」として理解していたと考えられる。日本語は、その名残を今もとどめている言語の1つであると位置づけられる。そのような言語は、日本語だけではなく、カフカス地方やアメリカ・インディアンやマヤの部族の間にも見出すことができるのではないかと思われる。動きというのは、場の変化であり、誰かが何かをするという観念では捉えられない。誰かが何かをするという観念が生まれて、言語は対格化して行ったものと推測される。つまり、時枝の言語過程説の考え方も、池上の「なる」の考え方も、その背景には、動詞を場の変化として捉える視点が含まれており、この場の変化を主体が表現しようとして生まれたのが言語であると考えられる。それは、ヒトが今、ここで起きている現象を捉えて、シンボル化したものであるから、自ずから主観的になるし、誰かが何かをするという視点を欠いたものになる。

3 日本語の談話と場の理論

談話（ディスコース）は、複数人のことばの交換を前提としており、最も場の制約が出やすい場面である。常に相手の存在を前提として、言葉を語るとき、場における主観性が表れやすいものとなる。場においては、言語は客観的事実を叙述するものではなく、主観の表現であるから、談話の相手との関係性がまず先に存在している。場における談話者相互の関係性が言語表現に影響を与えることになる。その最も典型的な表現方法が敬語である。場においては、談話の相手が内部の人間か外部の人間か、目上の人間か、同輩か、目下の人間かによって、使うことができる言葉の範囲が決まっている。目下の人間に使うとよい表現を目上の人間に使うと、言葉の使い方を誤っていると指摘される。これは文法における規則ではなく、世間＝閉じられた社会のルール＝規則である。これを場のルールと言ってもよい。日本語は、場の中で語られるので、文法上の制約だけではなく、場のルールの制約を受ける。いくら文法的に正しい言語を話しても、場のルールに反していれば、その言語表現は誤っていると評価されるのである。それを無視して使用すると、意味は通じるが、世間の壁にぶち当たることになる。この場のルールを知らないことを世間知らずと言う。

4 場の理論と言語

そこで、改めて場の理論から観た言語の特徴を整理すると、古代からヒトは場の中で生活をしており、場の中で言語を育んできたと考えられる。場の中では、これを冷静に外から見る第三者はおらず、誰もが場の中であって、場の変化を感じ取り、これを言語で表現したものと考えられる。そのため、主体が何かをするというのではなく、場が変化するという現象を主観的に言葉に表現してきたのである。場という社会的関係性がまず存在しており、その社会的な場の中で言語は生成されていったと考えられる。そこから、日本語には、談話について述べたような制約が場に課せられるとともに、これまでに各研究者によって発表されたような性質が色濃く残っているのである。各研究者の発表した内容を場の視点から整理をすると、次のように表現することができる。

第1に、動詞とは場の変化を表現するものである。現代のことばで「AがBを殺した」という事態は、場の内部からみると、「Bが死んだ」という場の変化が中心となる事態である。この事態を引き起こしたと考えられるのがAであるとする、「AによってBが死んだ」と表現されることになる。動詞を主体の行為としてではなく、場の変化として捉える視点から考えると、当然の結果である。おそらく古代社会においては、どの民族も、場の変化を表現するため、その変化を動詞で捉え、変化しないものを名詞で捉えたと考えられる。したがって、「AによってBが死んだ」という能格言語に特有の表現は、人類が言語を習得し始めた当初は、どの民族にも共通のことばであったと考えられるのである。何故なら、その昔は、行為主体というものではなく、みなそれぞれの場の中で生活していた。古代ギリシャを例にとれば、コロス（合唱隊）だけで、ヒーローはいなかったのである。

第2に、場においてはお互いの関係性がまず存在する。その関係性の背後に主体があると考えられる。したがって、関係性の中で言葉が生まれる。妻や夫は、子どもが生まれると、母や父になり、その親はじじ、ばばになる。生まれた子は、下の子が生まれると、ぼくからお兄ちゃんになる。ぼくは成長すると俺になり、会社の中では私になる。主体がまずあるのではなく、社会という場の関係性がまず存在するのであり、そこから、主体を表現する言語も生まれて来るので、僕、俺、私、君、貴方、貴殿と人称表現も多様になる。なぜなら、言葉は場の関係性の中で生成されるものであるから、社会関係が変化すれば、自己を表現する言葉も当然に変化をしていくのである。場の中では、自我というものがまず存在するわけではないから、関係性の中で言語表現は決定されるのである。「の」というのも本来、関係性を示す格助詞であったと考えられる。私の兄、あなたの会社は明らかに関係性であるが、これは更に所有へと拡張され、「私の子です」「俺の女だ」など、本来関係性であるものが所有性を帯びて使用される場合も生まれて来る。

第3に、場においては、主体が変化を感じてことばで表現するのであるから、事態の主観的把握がことばになる。そして場の働きが弱まるにつれ

て、次第に客観的な事態把握ができるようになっていく。そのため、場が弱く、客観的把握の強い言語社会においても、乳幼児期の言語の獲得段階においては、主観的な把握が中心となるのである。何故なら、乳幼児期においては、母子相互作用の場の中に存在しているのであり、母子関係から自他の分離が進むに連れて、その社会に適合する言語を習得していくからである。

第4に、場においては、ことばは場の変化や場の状態を表現する。場の内部において、どの場がどのようになったのか、どのようになっているのかを観たままに表現するのが本来の言葉の使い方である。場においては、ある場所で何かが起きるのである。この「ある場所」というのは、ヒトなどの主体の場合でも同じである。「桃の木が実を結ぶ」という場合、「桃の木」は主語ではなく、桃の木という場所において実を結ぶという変化が生じているという事態を見たとおりに報告する事態把握である。したがって、「桃の木に実が結ぶ」と表現することもできる。場の状態の表現の仕方なので、どちらの表現も可能なのである。また、「象は鼻が長い」という場合、「象」は、主語ではなく、象という場所に於いて鼻が長いという状態が存在しているという事態把握であると考えられる。場においては、ある場所で何かが起きるのである。

(以上)